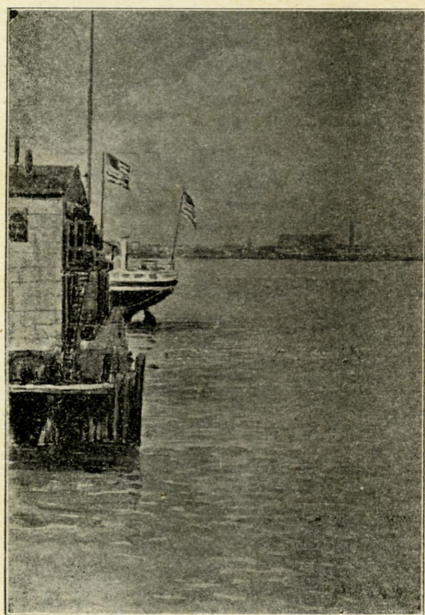


えて秋の色を忍ばしむ。山を下りて本道をゆくと十餘町、左に折るれば二十八番の觀音堂あり。堂は直立二百餘尺といふ白色の大岩の下にありて、面白き位置をなせり。有名なる秩父の鐘乳洞はこゝにあり。入口と出口と離れて二つあるは、吾國に比なしと里人誇りぬ。案内者を頼み燭を燈して入る。狭き口を身をかゝめて進むに階子あり、七八級を下れば外部の光り全く遮られて、たゞ一種の燈のみ覺束なく照せり。こゝは疊十ひらを敷き得べき廣さにて、鐘乳石、石筍等あまたあり。案内の男竹竿の先に燭を結びて高くかざしつゝ、是は何、彼は何と形の似たるを佛の名として事々しく述べ立つ。更に階子を下ると數十階、或は廣く或は狭き洞穴の間を縫ふて、上り又下りとかくして出口に達す。出口は入口の反對の側山上に在り、初めてなればいと珍らしと思ひぬ。

他に見るべきものもなければと、元來し道を大宮へと歸りしが、途すがら小流あり橋あり水車ありて景色あしからず、秋にもなれば再び遊ばんの心も起りぬ。



ボストン港の一景 松本喜八郎筆

十七日 曇、今日は都へ歸らんと思へは、とく起き出て仕度す。六時馬車に乗る。かの畫師も共に、車の上にて携えし毛布敷きて我に半座を頒つ。ゆられ／＼て太駄に到り馬を代ふ。こゝに四人のホーカイ節あり、乗合の人々輿に乗じて小錢を擲つ。かの畫師いづこよりか梨を求め來りて我にも頒つ、重ね／＼殊勝なる振數とやいはまし。

車の本庄に着きし時、上野行の列車の動き始めぬ。一汽車おかれて宿に歸りしは、夕陽小西湖に赤く輝く頃なりき。

(終)

三浦のなみ

(その二)

△ ▲ △

かけて歸さない。終に二三枚この日のスケッチを見せたら、查公曰く『私は時々公用で見取圖をかゝられますが、あなたが三十分でお描きになつたといふ處を、私は合間々々ではあつたけれど丁度二日かかりました。巡查でも繪がかけないと困ります』とつく／＼羨ましそうにいふた。